



Robert BUTTERWORTH,  
*Dickens, Religion and Society:*  
*The Plays of Dickens, Browning, Collins and Tennyson*  
(x+201 頁, Palgrave Macmillan,  
2016 年, 本体価格 £55)  
ISBN: 9781137558701

(評) 谷 綾子  
Ayako TANI

ディケンズの社会批判は彼の作品における最も有名かつ重要なテーマの一つである。本書は社会悪に対するディケンズの批判の中核にある彼の宗教的な姿勢について模索したものである。以下、各章の内容を紹介していく。

第1章では、著者は、ディケンズは社会悪の改善策に対して常に一定の姿勢を示しており、それは「すべての社会問題はキリスト教倫理によって解決される」というものだとして主張する。ディケンズのキリスト教への関心は、彼が *pastoral reform*, とりわけ牧師の *professionalism* に強い関心を寄せていたことから窺える。18世紀から19世紀初頭の牧師に見られた怠惰な状態を改めさせようとするこの *pastoral reform* にディケンズは同調し、*Sunday Under Three Heads* (1836) で彼は大学の牧師の堕落を指摘し、彼らが貴族的な姿勢を持ち、仕事をしないことを誇りにしていることを批判する。ディケンズにとっては牧師こそ ‘*practical Christianity*’ を体現する存在で、彼らの道徳的な行いにより社会は改善していくと考えていたのである。

第2章では、ヴィクトリア朝時代初期の人々の社会問題に対する態度とそれに対するディケンズの反応が概説されている。John Bird Sumner (1780-1862) は、当時の国教会の主流の考えを代表する人物で、1848年にはカンタベリーの大司教となっている。Sumner は、貧困は試練であり、それを通して道徳的にもなり貧しさに満足する心を育むことができると主張し、貧困問題を是正することに反対した。Sumner は *Poor Law Commission* のメンバーであり、この考えが1834年の *Poor Law Amendment Act* につながったのである。当時の牧師の多くは、従来の *Poor Law* では貧困層の堕落を悪化させ、彼らの怠惰を助長するだけと考え、Sumner の法の改正に賛成した。ディケンズは *Oliver Twist* においてこの考えを批判する。Oliver のおかわりの場面は有名だが、ここで問題なのはこうした救貧院の運営が法に反しているわけではなく、むしろ救貧院は貧者に楽をさせず二度

と戻ってきたくないと思わせる場所にしなければならないという Poor Law Amendment Act の理念を反映しているところである。ディケンズは作品を通して当時の基督教の貧困に対する主流の考えに挑戦しているのである。

第3章では、著者は *Oliver Twist* の Fagin の描かれ方における論争に対して、独自の見解を示している。ユダヤ人である Fagin が悪党として描かれている点を挙げて、Harry Stone や Deborah Heller はディケンズの反ユダヤ感情を指摘し、彼の人種差別主義を批判している。これに対して、筆者は Fagin のキャラクター造形がユダヤ人に対する侮蔑的なステレオタイプを反映させたものであることを認めたい。ディケンズがそのステレオタイプをどのように作品に用いたかについては議論の余地がある、とする。Fagin は確かに悪人として描かれているが、‘respectable society’ が彼より善良というわけではない。‘respectable Christian society’ は基督教の教えを全く守っていない。むしろ、救貧院では主人だけが太っていて子どもたちが飢えていたのに対し、Fagin の仲間には主人も手下も同様に良いものを食べている。皮肉なことに Oliver は Fagin のところに来て初めて人間としてより良い待遇を受けたのである。以上のことから、ディケンズは読者のユダヤ人に対する反感を煽るところか、彼らの基督教徒としての優越感を動揺させるために Fagin というキャラクターを用いたのだ、と著者は主張する。

第4章では、1850年代の基督教的社会観とそれに対応するディケンズの作風の変遷について述べられている。1830年代からの慈善運動が1850年までにはわずかながら実り、工場で働く労働者の処遇の改善を目指した Factory Act の法案が1847年に通った。しかしながら、実質上は実行されなかったも同然で、中でも Ten Hours Act は撤廃されてしまう。1848年に基督教徒は精神的な面だけではなく、物質面もサポートするべきだと主張する Christian Socialism が起こったのはこのような社会情勢が背景にあった。初期のディケンズは救貧院と Yorkshire school さえ改善されれば社会はよくなると考えていたが、1850年代にはもっと根本的な改善の必要性を感じるようになっていた。ヴィクトリア朝社会は初期に彼が考えていたよりも基督教精神が欠落していた。このような社会背景の下、ディケンズの作風も変化していく。初期作品では Fagin に代表されるように悪党はアウトサイダーだったが、後期作品では悪党はインサイダーとなった。それも悪党は個人としての悪党ではなく、社会のシステムそのものの悪を内面化した悪党として登場する。1850年代のディケンズは社会悪の根本的な解決を求めて、こうしたキャラクターを登場させるようになったのである。

第5章では、著者は *Bleak House* を基督教倫理という視点から読み直している。*Bleak House* は法律のみを基にして文明を築いた社会の腐敗を描いている。兄弟愛によって導かれていない社会の中で、Jo はディケンズが基督教倫

理観の欠如が引き起こすと考えていた三つの苦しみに苛まれている。まず貧困による身体的な痛み、次に人間性の喪失、そして Jo がほとんど ‘savage’ であり、精神的な未開人であるということである。宗教の助けは彼には届かない。聖ポール寺院の前に佇み、鐘の音を聞いてもそれが何を示しているのか Jo には分からないのである。このような退廃した社会の中の希望として描かれるのが Esther の存在である。Esther は元々他人であった人々を結び付ける役割を果たしている。Esther のキリスト教的人類愛が他人を結び付け、愛が愛を生むという善の循環を生み出しているのだ。Esther は、*Bleak House* の社会悪を解決したわけではないが、彼女の示した人類愛は社会を改善するための出発点を提供している。

第 6 章では、著者は *Hard Times* を取り上げて、労働組合に対するディケンズの態度を論じる。*Bleak House* は過去に縛られた世界が描かれていたが、*Hard Times* では対照的に過去の遺産とは無縁の新しい産業社会が登場する。しかし *Hard Times* の世界も *Bleak House* 同様、文明化されているとは言い難い。この産業社会では、労働者は ‘the Hands’ と呼ばれ、人間としてではなく労働資源としてみなされている。旧社会と新社会に共通する社会の根本的欠陥として、ディケンズは労働組合のあり方を挙げている。労働組合は、労働者の待遇の改善を訴え、実際に多くの改革をなしえていることは後の歴史が示す通りである。しかし、ディケンズは労働組合の負の側面に着目している。*Hard Times* で描かれている新しい社会は、人々は人類愛というキリスト教の基本理念を無視し、党派に分裂している社会の姿である。権力者が労働者を自分たちと同じ人間と思っていないのと同様に、労働組合は労働者に権力者を敵とみなすよう促している。Stephen は労働組合に入ることを拒否したために、結果的に死に追いやられている。兄弟愛ではなく党派心に支配された世界において、ある党に入ることを拒むということは、社会のはみ出し者になることであり、権力者からも労働者からも迫害されることになるのである。ディケンズは、労働組合は労働者の環境改善だけでなく、英国社会の分裂化をも促していることを主張している。

第 7 章では、著者は *Little Dorrit* を取り上げ、そこで描かれる拝金主義や社会悪について論じている。*Little Dorrit* の特徴は貧困などの社会悪はすべて「誰の責任でもない」という態度が浸透した世界であることである。神義論においては、悪は人災と天災という二種類に分けられており、人は人災にのみ責任をもつ、とされている。しかし、キリスト教的視点からいうと、人災と天災に区別はなく、すべてはキリスト教的倫理観で解決できるものなのである。*Little Dorrit* では、社会悪を「誰の責任でもない」と考えることで、事態を悪化させる世界が描かれている。この「誰の責任でもない」という姿勢は決定論にもつながる考え方で、時には殺人さえも本人には仕方なかったこととして肯定されてしまう。Riguard

は殺人を犯すが、彼はこれをもって生まれた性格がそうさせたのであって、自分には責任のないこととして認識している。しかし、ディケンズは環境が性格に影響を与えることを認めていたが、それが本人の努力によって乗り越えられないほどの壁だとは考えていなかった。むしろ貧困や殺人を「誰の責任でもない」と責任逃れる姿勢がさらなる悪を生み出すのだ。しかし *Little Dorrit* の世界における「誰の責任でもない」という姿勢の例外として描かれるのが、金銭的な罪である。Dorrit 氏は借金のため、債務者監獄に入れられるが、この牢獄には密輸入者も収容されているのである。この点で Dorrit 氏は密輸入者の延長上におかれており、破産はこの世界においては犯罪と同等にみなされているのである。Dorrit 氏は牢獄にいることを恥じているが、なぜ牢獄にいるかについては疑問視せず、破産を犯罪視する社会的態度を受容してしまっている。拝金主義に苦しめられながら、その拝金主義に囚われているところに、Dorrit 氏の苦しみがある。唯一この価値観から逃れているのは、キリスト教的倫理観に生きる Little Dorrit である。彼女は Mammon ではなく、神に仕えているため、牢獄にいてもそれを恥じずにいられる。ディケンズは貧困を *moral evil* と捉えており、貧困の存在自体がキリスト教的愛の欠如の結果と考えていた。ディケンズは、社会の「誰の責任でもない」という姿勢と拝金主義をやめたとき、社会は改善すると考えているのだ。

第 8 章ではディケンズの政治的態度について論じられている。ディケンズは法の改正よりもキリスト教的愛で社会を改善しようとしていたが、*Oliver Twist* にみられるような救貧院の環境改善は法の改正なしではなしえないものである。ディケンズの政治的態度に関する論争の中で、筆者は、ディケンズは心の変革以上の改革は唱えなかったという立場をとる。ディケンズは個人が変わらないことには社会は変わらないと考えており、*A Tale of Two Cities* で描かれているように、個人の精神的な悪が改善されない限り、革命を起こしたところで、新しい社会は旧社会と同じくらい腐敗してしまうと主張している。一時的ではない永久的な改革は、一人一人の精神的な変革にかかっているのである。著者は、この章でディケンズの、宗教こそが政治であるという姿勢を論じている。

第 9 章は、*Barnaby Rudge* に描かれる現状維持型の革命について論じられている。*A Tale of Two Cities* とは対照的に、*Barnaby Rudge* は現状を維持しようとし、どんな変革にも反対する人々の暴動が描かれている。ディケンズはカトリックを嫌っていたが、彼はこの作品において、カトリック教徒に対する思いがけないほどの同情の念を示している。しかし、それはディケンズの矛盾ではない。彼がカトリックを嫌っていたのは、その無意味な形式的儀式と権威主義であり、人類愛をキリスト教の本質と考えていたディケンズにとって、カトリック教徒にもプロテスタントと差別なく同情心を示すことは、彼の信条に合ったものだったのであ

る。この作品のヒーローとして描かれる Gabriel は、そうした denominationalism に陥らない人物として描かれている。暴動に加わった人々は個人レベルの動機を見たときは、それはキリスト教的信念に基づいたものに見えるかもしれないが、群衆のレベルではただの暴徒に他ならない。ディケンズは、反カトリック勢力からなる暴動がキリスト教的兄弟愛の破壊にしかならず、カトリック教徒もまた人間であるという認識を失わせる悪であることを描いているのである。

第 10 章では、著者は *A Tale of Two Cities* で描かれるフランス革命時のパリの描写を通して、革命の無意味さとキリスト教的愛の重要性を再確認している。フランス革命前、貴族たちの圧政は酷く、民衆たちは同じ人間としてみなされていなかった。しかし、フランス革命は貴族と民衆の立場の逆転をもたらしただけで、社会悪は何一つ改善されなかったのである。今度は貴族が人間以下の動物として扱われ、非人道的に殺されていく。復讐心によってなされた革命は旧社会と同じぐらい腐敗と悪がはびこっている。それに救いの光をもたらすのは Stephen の存在である。彼は結果的に、自分が犠牲になることで、この復讐の連鎖を断ち切る役割を果たしている。復讐の連鎖を断ち切ることが、本当の社会改革につながることをこの作品は表している。

第 11 章は、ディケンズの感傷的な態度に対する筆者の立場を述べたものである。ディケンズは感傷的であることで、しばしば批判を受けるが、著者はその典型例として挙げられる Jo が死ぬ場面に関して、これは Jo が兄弟愛を受けることができなかった結果の死として、宗教的な意味合いをもつものであると弁護している。著者は、少なくとも後期作品においては、ディケンズは宗教的な構造として一見感傷的と見える場面を書いており、一般に受け止められているほどに感情的ではなかったという立場を示している。

本書はディケンズの宗教的社会改革者としての姿勢を、諸作品を通して論じており、著者は、ディケンズの作品における社会批判を当時の社会的文脈の中のみならず、キリスト教的精神という普遍的な視点からの鑑賞にも耐えうるものであることを述べているのである。